

2013 年度 IAEG 総会の記録

本年度の IAEG 総会(Council meeting)は、9 月 24 日－25 日に開催された第 9 回アジア地域会議(アジアシンポジウム)の前日の 9 月 23 日に行われた。

会場 北京国際会議場 307 号室

日時 2013 年 9 月 23 日 9 時－18 時

議事

1. 開場挨拶 会長
2. 参加者確認 事務局長
3. 議事確認
4. バンフ会議議事録確認
5. 会長報告 会長
6. 事務局長報告
7. 会計報告
8. 副会長報告
9. Web サイト
10. IAEG 会誌
11. TOC から委員会報告
12. IAEG 主催および後援会議
 - ・北京シンポジウム
 - ・2014 年大会
 - ・2015 年会議および 2018 年大会
13. 50 周年記念誌の経過報告
14. IAEG の管理
 - ・規定の修正
 - ・IAEG-IRP および S-T 提案
15. 2014 年、2015 年の総会日程と場所

1. 開会挨拶

Prof. Carlos Delgado 会長挨拶に続き、事務局長から出席数と委任状で総会が成立する報告がされた。

2. 参加者

主要出席者は以下のとおり

役員

会長 Prof. Carlos Delgado(スペイン)

事務局長 Prof. FaquanWu(中国)

前会長 Dr. Fred Baynes(オーストラリア)

副会長(アフリカ) Dr. John Stiff(南アフリカ) 欠

副会長(アジア) Prof. Huang Runqui(中国)

副会長(オーストララッシア) Dr. Ann Williams(ニュージーランド)

副会長(南ヨーロッパ) Prof. AtiyeTugrul(トルコ)

副会長(北ヨーロッパ) Dr. Ian Jefferson(イギリス) 欠

副会長(北アメリカ) Dr. Rejean Couture(カナダ)

副会長(南アメリカ) Dr. Silvina Andrea Marfil(アルゼンチン)

元会長 Prof. Ricardo Oliveira(ポルトガル)

元会長 Prof. Paul Marinos(ギリシャ)

編集局長 Prof. Martin Culshaw(イギリス)

Web 管理者 Giorgio Lollino(イタリア)

このほか、各国から約 30 名が参加した。

Scott Burns(アメリカ)、Victor Osipove(ロシア)、Donald Helm(アメリカ)、などが出席したほか、アジアからは、中国、韓国、台湾、シンガポール、香港、ベトナム、インド、イランから出席があり、日本からは千木良会長、大塚副会長、茶石が出席した。



手前に役員、両サイドに各国グループが着席



Council meeting 会場風景

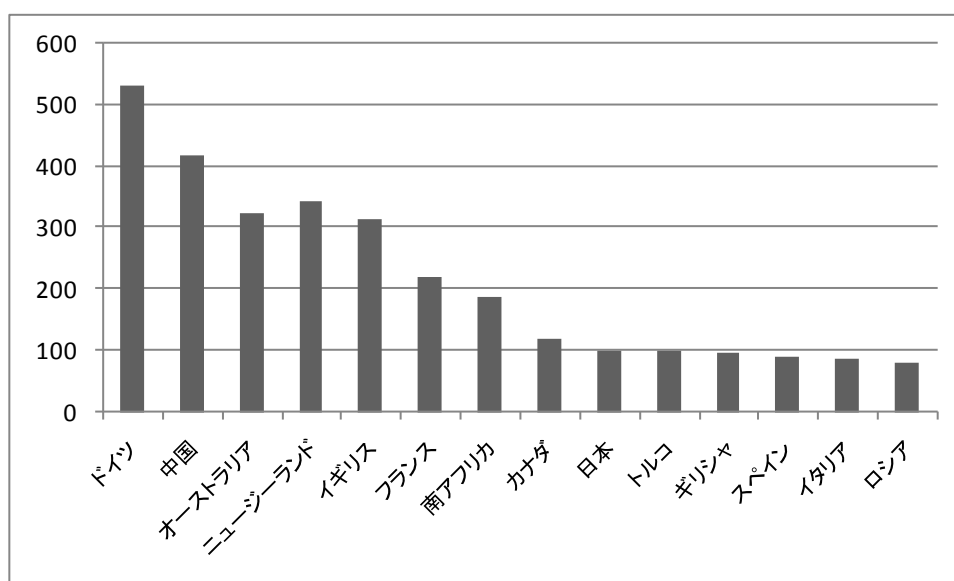
5. および 6. 会長および事務局長報告

会長から、IAEG の主な取組と課題について紹介があった。2014 年の 50 周年記念大会、会誌の編集と Springer との関係、3 学 Federation と JTC に関する行動などについて説明された。また、事務局長報告の後に、ISRM と ITA からスピーチがあった。

会長の活動報告に続いて、Wu 事務局長から主に会員の状況報告等があった。

① 会員状況

- ・ 57 の各国 IAEG グループのうち 31 の国から状況報告があった。
- ・ その合計は 3,515 名(会誌あり 2,020、会誌なし 1,477、賛助 31)
- ・ 昨年調査時の 3,229 名に比べて 9%増えたが、2010 年頃からは減少している。
- ・ ヨーロッパの人数が最も多く、次いでオーストララシアとアジアとなっている。
- ・ 会費については、期間内に納めたのは 20 カ国のみである。



主要国の会員状況

② 会誌

- ・ 会誌の配達状況調査を行ったが 11 カ国しか返事がなかった。
- ・ 会誌と E-token の配布は問題がなく、スプリンガーとも良好な状況にある。

③ 50 周年記念誌

- ・ 資料や写真が各国から集まっている。

④ 各種調査

- ・ 2012 年に応用地質分野で最も関心が高い項目の調査を行った。13 カ国から 134 件の返答があった。
- ・ 今後も毎年調査を行って行動計画や将来計画のための資料としたい。

⑤ IRP(International Research Program)と S-TAwards (Awards for Scientific and Technological Achievement)

IAEG 国際研究計画と研究成果の賞判定の仕組みについて検討し、案を提案した。人への賞としては RWP、CM、Arnould Medal があるが、研究の成果についても作りたい。この件は重要であり慎重に進めるが、2014 年の大会までにはまとめたい。

⑥ 事務局長の主な活動

- ・ 2012年9月20-21日 沿岸域地質工学国際シンポジウム 上海
- ・ 2012年8月5-10日 第34回国際地質学会の総会出席 ブリスベーン
- ・ 2012年12月17-18日 気候変動と地質工学シンポジウム ハノイ
- ・ 2013年5月12-15日 四川地震5周年シンポジウム 成都

⑦今後について

会員と活動はヨーロッパ、アジア、オーストララシアに集中しているが、2018年の大会の開催をアメリカが望んでおり、関係を密にする良い機会である。



Wu 事務局長によるプレゼン

7. 会計報告

会誌ありの会員数が 2,056、会誌なしが 1,320 と 2011 年に比べて増えているが、1 月末時点で 56 カ国のうち 35 カ国のみが会費を納めている。また、15 カ国からは返事がないので正確な会員数はわからない。

収入は 128K€、支出は 81K€で 47K€の黒字

会計に出てこないコストとして、フランス、中国で各々 20K€(260 万円)分を拠出しているほか、Springer から 15K€(約 200 万円)が編集局長に支払われている。

前会長から、2012 年分未払い国以外にそれ以前の会費未納国について催促すべきとの意見があり、参加していた当事国から反応があった。その他の国については、3 か月以内の支払いを会長と副会長で催促することとした。

8. 副会長報告

オーストララシア、アジア、南ヨーロッパ、南アメリカ地域各国の活動報告について各々副会長から報告があった。

アジアは Runqui Huang 副会長から報告され、日本については次回、第 10 回アジア地域会議(アジアシンポジウム)が日本の京都で開催される予定であることが述べられた。

9. Website of IAEG

Web マスターであるイタリアの会長の Giorgio Lollino 氏からサイトの状況について簡単な報告があった。

また、2012 年に行ったインターネットによる調査結果について Wu Faquan 事務局長から報告された。今回は、最も大きな応用地質の関心分野と、IAEG の発展への提言であった。

13 カ国から 134 件(関心分野 94、IAEG 提言 40)の応答があり、表にまとめて示した。このような調査は、今後も毎年実施する方針である。

10. 会誌報告

編集局長は長年勤めた Brian Hawkins 氏から Martin Culshaw 氏に代わった。

昨年 4 月から今年 8 月末までに 393 の論文提出(今年分は 194)があり、年間では 275 程度を示している。そのうち、55%から 70%は査読の前に提出者に戻している。理由は、地質的内容が乏しかったり、英文が貧弱などである。

昨年 4 月から 12 月までの間で、199 提出があり 119 を戻したが、23 はまだ査読中である。したがって、年間では 80 から 100 位の論文数となっている。

受理した論文の編集が大変であり、1 論文に 2 から 4 時間を要する。Springer の同意を得ているが、熟練者に依頼することを考えており、1 論文に 50€くらいの報酬を提案している。

論文の英語またはフランス語の質は非常に重要な問題で、時間がかかることである。

編集の助手あるいは委員がいるとよい。英語あるいはフランス語力があって、査読経験があって時間がある人が要件となる。

Hawkins 氏は 1 週間に 2 日程度の仕事と言ったが、一人の編集局長に多くのことを期待しており、負担を軽減することを考えてほしい。

また、会誌の電子化について議論がなされた。これは、長年議論していることであり、会費収入(現在の先進国の会費は、会誌あり 37€、会誌なし 12€)にも影響するなど慎重な対応が必要との意見が出された。

11. 委員会報告

TOC(Technical Overseeing Commission)メンバー

メンバーである前会長の Fred Baynes, 副会長の SilvinaMarfil, Ann Williams, Runqiu Huang の各氏から委員会の活動状況の報告があり、不活発なものについては中止あるいはメンバー交代の提言があった。

第 7 回アジア地域会議の成都で日本も加わって初会合があった C-24(Active Tectonics)については、以下の報告がなされている。

- ・ 成都で開催された四川地震 5 周年シンポジウムに参加
- ・ 地震地質学と四川地域の災害、という本を出版
- ・ 2013 年 4 月 20 日の Lushan 地震の緊急調査

12. IAEG 関係会議

(1)北京のアジアシンポジウム

24 日から始まるアジアシンポジウムについて Wu Faquan 事務局長から報告があった。約 220 人が参加、165 のプロシーディング、36 の Keynote、88 の口頭発表を予定している。

(2)2014 年の IAEG 大会

イタリアの Giorgio Lollino 氏から準備状況について報告があった。

1,760 ものアブストラクト提出があった。論文の締切は 8 月末であった。

(3)2015 年の会議と 2018 年の IAEG 大会

①2015 年アジア地域会議(アジアシンポジウム)

第 10 回の記念シンポジウムを京都で開催する計画が日本の千木良会長からプレゼンされた。開催予定日は、9 月 26-28 日を予定、場所は京都大学。

②ブルガリア会議

ブルガリアで 2015 年 9 月に予定している国内会議を IAEG 会議としたい旨の意思表示がブルガリアからなされた。

③2018 年第 12 回 IAEG 大会

アメリカの Scott Burns 氏(2007-2010 副会長)から、2018 年に予定している AEG 会議と第 12 回 IAEG 大会として開催したいとの提案がプレゼンされた。場所は、サンフランシスコで、簡単な冊子が配られた。

提案に対し、IAEG 大会は独立会議なので AEG 会議との共催はどうか、と疑問が呈された。

いずれにせよ、2014 年のトリノでの総会で決定することになり、他候補地があれば投票となる。



千木良会長による 2015 年 第 10 回アジアシンポジウム日本開催のプレゼン



アメリカの Scott Burns 氏による 2018 年 IAEG 大会候補地のプレゼン

13. 50周年記念誌

会長から報告があった。220ページ+写真になりそうで、本の構成、体裁などほぼ決定した。記念となる写真やプロシーディングも相当集まったが、どうしても見つからないものもある。

14. IAEGの管理

(1)規定の改正

Ann Williams 副会長から提案された。Richard Wolters Prize の年齢資格を 40 歳以下から 35 歳とし、対象会議の IAEG メンバー 3 人からなる Jury が審査するといった改定が主な内容である。

また、HanzCloos Medal の小変更と Marcel Arnould Medal について 2 年ごとに選考とするなどの点が改定された。

提案に対し、一部の修正があったものの承認された。

(2)IAEG-IRP と S-T Awards

①IRP

技術継承を進めるために、国際研究計画を提案する。これは、委員会活動を中心にテーマを決めて取り組むもので、役員会が選定、委員長などを決める。

計画はテーマを国際的に議論するものであるが、同時に最大 5 件以内とし、期間は最大でも 4 年とする。委員会からの申込みは随時、事務局長が受付、提案書の書式と認定要件が示された。なお、研究費の 5% までの IAEG 支援が受けられる。

②S-T Awards

人に対しての賞ではなく、研究や技術成果に対する賞とすることが提案された。研究賞(AAA)と技術開発賞(TPA)のふたつがあり、2 年ごとを対象とする。また、カテゴリ 1 とカテゴリ 2 があり、1 は技術継承を促進する理論の著しい進歩や技術革新的成果に対するもの、2 は 1 よりやや低いレベルの重要な成果に対するもの、とされる。

1 は、最大 5 件、人数は 1 チーム 10 人以内、2 は 10 件以内で 1 件 5 人以内とする。

これらの提案が了承された。

15. 次回の役員会と総会

①次回、2014 年の総会は、イタリアのトリノで 2014 年 9 月の大会前に役員会と総会を開催する。

②2015 年総会

・2015 年第 10 回アジア地域会議を予定する京都での総会の開催が提案されたが、Marinos 元会長から意見があり、また、ブルガリアの 2015 年会議で開催する提案もあったことから、決定は 2014 年トリノでの総会に持ち越された。通常、次回開催地は 1 年前に決まっておき、次期役員も 2014 年総会の選挙で改選されることから、その後の場所の選定については強いこだわりはなかった。

京都での IAEG 地域会議の開催は了承された。

③2016 年総会

2015 年に関連して、Marinos、Oliveira 元会長から京都大会までさかのぼって IGC 大会での総会の開催を検討すべきという意見が出された。イタリアのフィレンチェで開催された第 32 回 IGC 大会までは、IAEG 総会も同時開催されていた。

2016 年の IGC 大会は南アフリカのケープタウンでの開催が決まっている。IAEG の発展にも寄与す

る可能性もあり、2014年のトリノの総会で議論することが提案、了承された。

その他

Council meeting の翌日の 24 日には第 9 回アジアシンポジウムが始まり、Wu 事務局長以下の主催で昼食会が開催された。中国、韓国、香港、ベトナム、シンガポール、インド、イランが参加し、日本から千木良会長、大塚副会長、茶石が参加した。午後一番に千木良会長と Wu 氏のプレゼンがあったこともあり、時間が乏しく自己紹介程度の会となったが、アジアの主要メンバーが集まった場としては非常に良かった。

会議の直前にアジア各国グループにポスター作成の要望があり、日本からも急ぎよ準備し印刷して持参した。中国、韓国、インドのものが張り出されたが、展示されたブースが奥まった場所であり、あまり目立たなかったのは残念であった。

今回の Council meeting には日本から 3 名が参加し、他国に比べて決して少なくはなく、2015 年における京都でのアジアシンポの開催の決定、また、千木良会長のプレゼン等を通じて日本の存在と活動が十分にアピールできたと感じられた。

以上

参考 IAEG 会議の開催経過

IGCとIAEG大会および総会 等の開催年次

年	IGC大会	IAEG Council	IAEG大会	調査団	アジアシンポ	IAEG会長	アジア地区副会長	
		アムステルダム	6th チュニジア					
1991		Sfax		1 フランス・イタリア				
1992	29th 京都	京都		2 ユーロトンネル		ポルトガル R. Oliveira	日本 小島	
1993		モンペリエ		3 ビレネー				
1994		リスボン	7th リスボン	4 リスボン to ケニア				
1995		コペンハーゲン		5 英国				
1996	30th 北京	北京		6 三峽-中国		ギリシャ P. Marinos	中国 Wang Sijing	
1997		アテネ	シンポジウム	7 ギリシャ・トルコ	1st 東京			
1998		バンクーバー	8th バンクーバー	8 カナダ・アメリカ				
1999		カツマンズ		9 マレーシア・ネパール	2nd マレーシア			
2000	31th リオデジャネイロ	リオデジャネイロ		10 ブラジル・ペルー		中国 Wang Sijing	マレーシア Komoo	
2001		ヘルシンキ			3rd ヨグヤカルタ			
2002		ダーバン	9th SAダーバン	11 南アフリカ				
2003		イスタンブル			4th 香港	オランダ N. Rengers	日本 大島	
2004	32th フィレンツェ	フィレンツェ		12 フィレンツェ				
2005		リヨン			5th カツマンズ			
2006		ノッティンガム	10th UKノッティンガム	13 ノッティンガム				ノッティンガムのカウンシルではオスロのIGC大会に合わせる予定であった
2007		コロラド(Vail)			6th ソウル	オーストラリア F. Baynes	中国 F.Wu	
2008	33th オスロ	マドリッド						
2009		成都			7th 成都			
2010		オークランド	11th NZオークランド					役員改選
2011		モスクワ			8th インド	スペイン Delgado	中国 Huang	EngeoPro2011 総会でプリズベンとバンフを投票
2012	34th プリズベン	バンフ						
2013		中国			9th 北京			
2014		トリノ	12th トリノ					
2015		?			10th 京都			役員改選
2016	35th ケープタウン							

